

像の彼方に在るもの

奥村家造

形象あるものは、美的直観や表象と何の関係も無い。マクス・ピカートはそのような見解とは全く無縁の存在である。斯かる諸見解はピカートの形象把握力を減衰させる。^{なかんずく}就中、表象は彼の純粋性を汚濁させる。

——【遺稿断簡¹⁾】——



マクス・ピカート (1888-1965)
 (『古稀論集』より)

マクス・ピカートは終生^{ビルト}形象を追い続けた詩人である。と言っても、その語源、意味を遡源して、語幹や派生語を探したのではない。また、エルンスト・カシーラーが『シンボル形式の哲学』で慎重、且入念に主張したように「形象は、もはや、自立的な事物として、精神へ、改めて働きかけようとするのではなくて、精神のために、その創造力の表現たらんとするのである」と、重々しく、「神話意識の弁証法」を説く訳ではない。²⁾確かに「神がその姿を躡わされるのは人間においてである。人間は神の似姿である。何故に、神がその姿を躡わされるかは判らない。神は姿を躡わされる、が同時に、神は、それ自身、究め難いものである」と³⁾ピカートが語る時、一瞬、その言葉をカシーラーの手法で説明しようとする衝動に駆られても不思議ではない。誰の胸にも湧き上るこの情動に、炯眼の詩人ピカートが気付かぬ筈がない。直ちに諫止の言葉が、そっと添えられる。「神が人間の顔だけではなく、人間の姿全体に、その姿を躡わされていることは周知のことである。しかし神の姿が人間の顔に、この上なく明確に躡われているのであるから、外のことはさし置いて、人間の顔に手を染めてみよう⁴⁾」。これが、彼の著書『人間の顔』の出発点であった。勿論、ピカートがBildと言ったのは、人間の顔だけではない。人間の中に、人間のおかれた状況の中で、風景、芸術、果ては詩の中で、私たちの眼に映る、表現されたもの die bildhafte Erscheinung が形象と呼ばれる。ピカートは現前する《事実そのもの》を見るのである (Fragmente, S. 14.)。

形象の手本の一つ『人間の顔』はこんな風貌を呈している。

どの人間の顔にも手付かずに取って置いたような所が少し有る。ここでは何事も起らず、何の動きも無い。一條の星影が思い切ってこの場所を訪^{おと}おとしたことが一度だってあったのだろうか。それは、まるで、このような人間の顔にあっては、細やかな^{きさ}久遠^{くわん}の場所を思わせる。

この場所には微塵の動きも無いと言ったが、だからと言って、空洞とも思われぬ。この空間は細やかな久遠の場所、こんなところが空洞である筈がない。唯、手付かずに^ななっているだけのこ

とである。顔がこの場所を見守っている。相も変わらず、この場所を見回っている。その中に顔の見回る範囲がだんだん広くなって行く。顔が細やかな久遠の場所を、その都度広げて行き、自分も大きくなってゆく。このような場所の周りには、まるで、このような顔の造られることもあるようである。このような場所を中心に顔全体が出来上っている。この場所自体は空洞なのである。だがそれは、その中に、神々しい空洞を宿している。しかも、この神々しい空洞は、奇妙に矛盾している癖に、溢れん許りに見える。

臨終に際して、人間の顔が見守っている久遠の場所には神々しいものが現われる。顔全体が久遠の場所に成る。生前よりも遙かに偉大で深みの有るものに成る。これが人間と動物の違いである⁵⁾。



(1863)



(1872)

ドストエーフスキ(1821~1881)

ところが、顔の歴史は、この人間の顔の佇まいが、或る日、突如、変貌を迫られると言う。あの人間の顔にこそ具えられている細やかな久遠の場所も、顔共^{ごと}そっくり、いきなり変って了う。しかも、それが余りにひっそりと進行するので人間の顔自身がそのことに気付かぬ位である。変化は天上の神からのものと同じように、人間の心からも起る。凡ゆる顔から神の似姿が失せて了ったのである。この、激しく、しかも、肅々と進行する変化をピカ

ートはロシアの文学者ドストエーフスキ(1821-81)の二つの顔に認めている(上掲写真参照)。42歳の時と、51歳の時の写真である。先ず若い方の写真を観ることにしよう。明らかに外面が変わっている。唯変っていると言うだけではない。引き^ひ攀^きって、何かに追い立てられてでもいるようである。外面を受け止めようと顔が前方へぐんと^せ迫^り出している。余りにも前面への突出が著しいために、到底元へ収まりそうにもない。ところで二つ目の顔はどうであろうか。少し老けている。何という変りようであろう。この顔も引き^ひ攀^きってはいる。しかし、それは内面がつまりすぎて、はち切れんばかりになっているだけのことである。この^こ痙^攣は心の内面深くへ及び、顔が変わっているのである。外面は、それでも、内面の為に^{ていざい}体裁を保ってはいるが、もはや^も蛻^けの殻であることは誰の目にも明らかである。外界に対して内面世界の作った隔壁にすぎぬもの、それが顔の表面である。人間の顔に宿る善きものは、個々の人の場合のみならず、一世代まるごとに、減衰、疲弊したとしても不思議ではない。今、ドストエーフスキの二葉の写真で見たように、1860年、1870年の顔と現代の顔を比較してみると驚くことがある。それは顔の変り方についての驚きもさることながら、それ以上に、極めて短時日のうちに一つの世代全体が変化することを知ることである。一切のものが、同じ様に、いきなり取っ^と捉^まるのであるから、このような変化は民族単位、社会単位で明確に説明のつくものではない。そう言えば、自然には、何の前ぶれも無く突如起る変化があって、之を突然変異と名付けている。世代が代ると種の相貌が変るのである。自然の突然変異は、しかし、単一の種の内でのみ起るのである。人間の顔の場合には、すべてが、突如として変る。だから、自然科学の手法を借りて、この突然変異を⁶⁾解き明^かすことは出来ぬ。

『神よりの逃走』でピカートは、再び、人間の顔を論じている⁷⁾。形象 das Bild のことは先に少

し触れた。その際、視野拡大のために、カシーラーの形象論の一片を援用した。ここでも少し逸脱して、も一度、カシーラーの立場を紹介する。一つには、顔、像の反復から生ずる倦怠から思考を救うためであり、二つには、詩的表現への陶醉から覚めて、冷静を取り戻すためである。カシーラーは前回同様「神話的意識の弁証法」の末尾部分からの引用である。

美的なものの基本的方向を特徴づけるのは、像が純粋にそれとして認められ、その機能を果たすためにおのれ自身とその内容を少しも棄てる必要がないということだからである。神話は像のうちに、実体的現実の断片を、事物の世界の一部と見るのだが、この断片、この部分は、もとの現実や世界と同じだけの、あるいはそれ以上の力をそなえているのだ。

美意識ははじめから純粋な「観察」にひたり、あらゆる形式の行為とは一線を劃し、それに対立する観照の形式をつくりあげるのであるが、意識のこうした態度において描かれる像にしてはじめて、ある純粋に内在的な重要性を獲得することになるのである。この像は、事物の経験的-実在的な現実性に対してはおのれが「仮象」であることを認める。だが、この仮象はおのれに固有の真理を有している。なぜなら、それはおのれに固有の法則性を有しているからである。この法則性に還帰してゆくことによって、同時に意識の新たな自由が成立する。⁸⁾（傍点筆者）

シンボル形式の哲学全般から見ても、像の問題は重要であり興味につきないものであるが、特に、その第二部神話的思考終章は、神話固有の像世界 *die eigenen Bildwelt*⁹⁾ が神話の啓示、表出に不可欠のモメントでありながら、同時に、神話の進展につれて、その表出と表現意志の間に齟齬が生じ、神話的意識のうちに内的葛藤を招く機縁ともなる。しかし、この神話的意識に現われた内部分裂が、かえって、神話の究極の根拠と深みを私たちに覗かせてくれる。創出と破滅を腹背二面とした結構、*Krise* が像世界の辯証法なのである。これがカシーラーの像に対する立場の一側面である。

すでに、前書『人間の顔』の中で、ピカートは「すべての人が神の似姿を失って了った」と言った。¹⁰⁾ その思いは逃走の人間において、勿論、ますます熾烈になる。「逃走の顔には中心もなければ、それへと向って努力すべき内部もない。逃走の顔は、信仰の顔のように内部へ、すなわち求心的に方向づけられてはおらず、遠心的な方向にむけられている。顔は自己をはなれて、外部へと逃走するのである。顔は、信仰の世界におけるように、そこで内部がおわり外部がはじまるころの壁、つまり内部と外部の中間にある境界の壁ではなく、単に外部的な壁、とりもなおさず逃走がそこにはじまるころの壁、そこからすべてが飛び散る平面であるにすぎない¹¹⁾」。その構造、その根拠、その迅速、そして、その劇甚——そのことにすら気づき得ぬ逃走とは、そも、一体、何なのであろうか。

それかあらぬか、ピカートは、逃走の世界でも、信仰と不信の対比を手がかりに、像の妙理を訴え続ける。「信仰の顔の像のなかには、その表面の線が示しているよりも遙かに多くのものが含まれている。顔の像には深さがある。世界の初めに人間が創造されたことと、今生きている人間の像との間には、人間の罪が介在する。その罪の中に人間の像の深さが有る。だから、その罪

を強く感じれば感じるほど、その人の人間性の像は一層深さを増してゆく。この像の線は、まるで魔術のしるしのようにであり、胸奥の地獄に懸けられた悪魔祓いのしるしのものである。地獄の上におかれし像、その安らかなこと如何許りぞ。像は、神が罪を許し給いし折、罪の上に付け給いししるしである¹²⁾。免罪のしるしを戴く人はまだ信仰の世界にいる。像が免罪のしるしであるとは奇妙な表現に聞えるが、先述のカシーラーの形象論を想い起してみると興味深い示唆が浮んで来る。確か、その際カシーラーは像世界を背景に、神話における宗教意識の明澄性と、美意識の純粹性が、観照の形式を作りあげることによって、独自の法則を発見し、精神の創造力の純粹な表現になると結んだのであった。その神話の像世界から宗教が生れ、自立した時、どんなことが起ったのであろうか。像世界は攪乱されたのであろうか、汚濁されたのであろうか。

人間の顔について語られた時、すでに、何度か、神の似姿を捨て、忘れ去ろうとしている人間、神の眼指しに大いなる慰めを憶えた人間の姿が描かれたことがあった。逃走の世界では、人間は、絶えず、促されるように、そして急き立てられてでもいるかのように、只管逃走を重ね、続け、一向に止めようとはしない。それでもその途上で、まるで邪魔物に引っ掛り、障碍物にぶつかりでもした時のように、逃走が妨げられ、一瞬怯み停滞した時には似姿に思いを馳せ、自らの不明不信を託つことも二度三度ではなかった。「信仰の顔は、顕らかな、多くの偉大にして眼に見えざる顔の中心である。そこから出て不可視のものへ通ずる道だけが一目瞭然である。逃走の顔には、それが表示している以上のものは具わっていない。そこから出て不可視のものに向う道は一つもなく、有るのは唯別の逃走の顔へ通ずる道のみである¹³⁾」。逃走という名の巨怪なブルドザーが昼夜を分たず縦横無尽に暴れ回った後に残されたものは無の平面と不安だけである。「今や人間は、秋になると電線の辺りを、何か落ち着かぬ様に、あちこち飛び交い、最後の鳥の到来を、そして、鳥たち全部へ逃走の合図をしてくれる人を待つ鳥そっくりに思われる¹⁴⁾」。眼下に広がる大都会は唯逃走のみを製造する巨怪な機械装置のようである。だから都会に住む人たちは、互いに、いつも、何処で何をしようとも、他人が自分よりもっと速い逃走の方法を知っている癖に、自分の胸一つに仕舞込んで話さないのぢやないかと不安になる。不安が高ずれば、喫茶店にいても、最後の逃走の合図を携えて伝令が来はせぬかと、戸口の開閉がしきりと気になって仕様が無い。時には、自分自身が逃走の王 *der König der Flucht* ではないかと勘違いすることもあれば、今現に目の前にしている逃走が、ひよっとすると、もっと遙かに大きな逃走の残り物ではないかとも思う¹⁵⁾。

世の凡ゆるものが逃走の一途を辿っているのであるから、自然の総ての事象も例外ではない。四季、昼夜も逃走の不安に嘖まれている。四季の間には、もはや、何の信頼も無い。春の一寸片^{ひとかけら}が、いきなり、冬へ突入して来るかと思えば、冬はその一寸片を夏へ追いやる。一年中、すべての四季がごちゃごちゃに引っ繰り返り、くっつき合ったり、打ち当たったりしている。どの四季も、もはや、他の四季を信頼してはいない。四季は大いなる没落の前に、まるで崩落したように、不安にさらされている。そして、逃走と共に駆け抜ける気構えである¹⁶⁾。

逃走は、その劇甚と弥漫において森羅万象を被うと言う。その超絶性の故に人間は自己の逃走理由を質^{たづ}すことなく、自分が神から逃走していることも忘れて¹⁷⁾いる。その同じ人間が、どうして不安に襲われたり、逃走の王の出現を期待したりするのであろうか。不安は、この場合、おそらく、自分が逃走に取り残されることについてではなく、この逃走が、一体、この程度に落付くの

かどうか、ひよっとして、これよりも遙かに大きな逃走に、否応無く巻込まれるのではないか、ということに関するものである。

ピカートは『神よりの逃走』を「追跡者」DER VERFOLGERの章で結んでいる。逃走のもつ潜在力、破壊力の測り知れぬほどに大きなものであることを認めた上で、これまでの筆勢とは正反対に、その被害は、予想に比べれば、破壊、荒廃も極めて微々たるものであると説明する。この説明の理由並びに根拠は次の通りである。逃走という形成物 das Fluchtgebilde は腐敗させ、破壊しようとする。だが思うようにはならない。逃走者は到るところで神に打ち当たるからである。逃走の途上で、逃走者がその都度、そこから跳ね返されるのは神なのである。神に由来するものは、仮令それが逃走するものであっても、己が思うままに腐敗させ破壊することは出来ぬ。多くのものが逃走している。しかし、どれもこれも神の持物なのである。¹⁸⁾『神よりの逃走』は、こんな風に、僅か四頁足らずの文章で結ばれている。この静けさは何としたことであろう。貸借対照表の均衡は、すでに、見事にとれている。その理由は単純明解である。神の力が逃走の構造全体を支えているからである。その力は完膚無きまでに一物をも見逃すところが無い。逃走者がどこへ逃れようとも、到るところに神は在す。どこからでも一目散に逃走のやり直しが利くのは、どこにでも神が在すからである。逃走者はその都度前より勢いよく逃走する。しかるに、その到着を待つかのように、どこにでも神は在す。神の在し得ぬ地点は一つも無い。だから逃走できぬ場所はどこにも無い。逃走が斯くも広範に及び劇甚なのは、それほどに神が偉大だからである。¹⁹⁾逃走者は、事々に、神の堅固さ Gottes Festigkeit を身を以て感じ、証明している。しかも彼は、その衝撃を自らの逃走の手応えと感違いしているかのようである。逃走する人間に斯くも深き不明、愚昧そして恣意が、今猶、許されているのは、神が、その都度、逃走者人間のすぐ傍に在すからである。然已ならず逃走の最中であって、逃走者と追跡者は、交交に、勝敗の順位を代えながら、逃走の終末近く、結局は、逃走者が追従者になって了っている。それが逃走の終りであり、取りも直さず、神の愛だと言う。

若しバルチャーエフの言うように、神が人間に自由であることの義務を課され、如何なる困難に遭遇しようと、如何に多くの犠牲を払い、苦悩を舐めようとも、物ともせず、精神の自由を守るべしと仰せられたのなら、²⁰⁾今猶、逃走を止めぬ現代の人間は、唯、逃走するもの der Fliehende と呼ばれこそすれ、人間の名には値いしないであろう。その愚迷は二重である。神よりの責務に気付かぬ許りか、その気付かぬ己が姿にも聊さかの見当識も無いからである。

ピカートの描く世界は、終末、黙示のそれではない。再臨待望の思いでもない。巨怪とより言いやうのない逃走の世界である。その世界の中に徹している。

今猶、人間は逃走する、しかも追跡者たる神までが人間の後を追う。人間は、その都度、あの神の姿を一層明瞭に認める。逃走する者たちは、まるで神の前を転がる糸毬のようでしかない。あの神を覆っていたものが、すっかり、剥ぎ取られてしまったのである。逃走の劇しさが、すべてのものを、その流れに呑み込んだのである。今日ほどに、斯くも神の姿が明瞭になったことは、かつて無かった。何故ならば、神の明瞭さの前に置かれた一切のものが、逃走という、あの糸毬の中へ押し込まれ、丸め込まれたからである。かつて人間は逃走してやろうと思っただけである、なのに、今日、人間は逃走しなくてはならぬ。²¹⁾

もはや疑惑の念を胸に秘めて神のことを思う必要はない。一切の疑念は、一切の可能性共々逃走が持ち去ってくれたのである。逃走の終焉では神の姿が殊更に明瞭になった。それと同時に、逃走での主従関係が逆転した。これまで主人と思っていた逃走の人間は、神が明瞭になるのを手助けする一介の運搬人、清掃人にすぎない。

しかし、人智では測り難いことがある。神が自分たちの直ぐ後に在すからこそ、逃走できることを逃走する者たちは心得ているのである。自分たちが神から逃走し、神が自分たちより遙かに敏捷なるが故に、逃走者たちは、唯只管に逃走を敢行する。自分たちがいつ何時でも神の許に赴けること、いつでも神の側におられることを知っている。だからこそ逃走者たちは、一時も神の許にいたくとも平気でいられるのである。何たる増長、横柄であろう。

人間の何れの行為も像に由来するが故に、（あらためて）像へ立ち還らねばならぬ。人間は像を運ぶ者である。人間がいる、すると絵のような実物の人間の彼方には像が在る。

神は言葉に拠って事物をつくり給うたのであるから、人間の言葉には、像としての事物を造り出す力が有る。

——『遺稿断簡』²²⁾——

信仰の顔は像 ein Bild を成しているが、逃走の顔は部分の寄り集り eine Summe von Teilen にすぎない。人間が神から離背したことにより、顔は、凡そ像の名に値いするものの一切を失ってしまった。これがマクス・ピカートの診断である。かつて、顔としての一つの像を結んでいた、鼻、口、額、眼、頬の諸部分が、今では外面に隣り合って置かれているだけのことである。顔が崩壊しているのである。²³⁾ 寄せ集めたからとて、それ以上のもの ein Mehr に成る筈もなく、像 ein Bild が生れる訳でもない。そこでは「あらゆる部分がまるで単独で飛び散って行ってよいかのように急激に脱落してゆく」。²⁴⁾ 顔の各部分がお互いに保っている関係は唯一つ、お互いに逃走を確認し合う機縁、しるしとして役立っているということだけである。例えば、具体的には、顔の中での口の様態についてピカートに聞いてみよう。「そのような逃走の顔のなかにある口からは、あらゆる言葉がすでに飛び去ってしまっている。そのような口は、とっくに先の方へ行ってしまっている言葉を、遅れ馳せに真似るだけである。口は徒に明確な縁をかたちづくろうとする。というのは、その下には沈黙の深みがなく、あるのはただ真空だけなのだ。そして口は真空のうえに自己の姿をまとまりあるものとして保つことはできない。だから口は自分のところから逃げ出した言葉をもとめて、傷口のように開かれ、よろめくのである。口はまるで軟体動物のようにぱっくりと開かれたり、収縮したりするのである」。²⁵⁾ 眼も、又、事情は口と同じである。元来、眼は、凡ゆる神の創造が神へ通ずる往還の窓であり、そのことに依って、人間たることを証しする二條の光の河であった。しかし、今、逃走の顔の中で、眼はくすんだ二つのランプのように、誰も照らす訳ではない。辛うじて逃走の尾燈の役を演じているにすぎない。²⁶⁾ 「しかし、人間が神から逃走し、もはや神の前に何一つ罪を持たなくなれば、顔には深さが無くなり、平べったくなる。かつては罪の深さを湛えていたその顔に、今や、追立てられ地均しされるのではないかとい

う不安が漲る。何故それが不安なのか理由は定かではないが、それだけに走り回らずにはいられぬ不安が有る。そんな顔は顔では無くなり、しかめ面²⁷⁾になる」。

もはや、しかめ面²⁵⁾しか残し得ぬ逃走の人間の面相に、何故斯くも執拗に、ピカートは似姿の諸相を辿り行こうとするのか。それは最後に残された細やかな経験知に拠る。自然信仰の影さえ無く、一片の信仰理論が無くとも、一人の人間の顔を観ただけで、その人が信仰の世界向きに定められていて、逃走の世界向きでないことが判るものである。この直観が大切なのは、私たちが顔に対する決断へと促す点に在る。人間の顔は、他の体の部分に比べると一際目立っている。他のどの動物の顔と比べても遙かにその差違は著しい。顔によって己が運命と定められていること、例えば顔にはっきりと顕われている傾向を引き受ける、あるいは自己の内面性を他所に向けてしまおうと決断するために顔は人間に差し出されている。ところが、人間は、思い余って、決断し損う。すると人間は、その都度決って、顔へと連れかえされる。まるで犯罪者が犯行現場へ戻るように、人間はその都度あらためて顔を観なくてはならない。そして殺害者が近付けば、被害者の傷口がいきなり開くように、神へと決断せぬ一人の人間が鏡に映る己が面相を観た途端、目の前で、自分の顔の深淵がにわかにか口を開けるのである。それにも拘わらず、人間は、内と外との出会いの磁場ともいべき顔へ立ち還り、その都度、決断を迫られる。決断には勇気がなくてはならぬ。決断の場、顔は、同時に、勇気の源泉でもある。顔ほど、遙か後方、深淵の間近に在る体の部分は無い。しかし、又、顔ほど、これほど前方、世界の彼方に据え込まれた部分はない。それに、後方へは深淵に臨もうとする冒険、前方へは世界に立向う冒険、顔はこのような緊迫した状況に生きている。²⁹⁾人間は絶えず顔の前に立ち決断する。

人間の顔は、人間により遙かに多く神へ差し出されている。だから人間の顔は何にもまして神への応答、造物主への応答なのである。斯かる応答は沈黙の内になされる。顔の中の総てのものは之に則る。顔は、神への応答、神への沈黙として許された限度でのみ、人間にとって、聞えるもの、見えるものとなる。人間に許された姿の明瞭性と音の清澄性とはかの沈黙を犯すことではできぬ。漢字、問と闇の由来はこの事情を美事に証示している。「暗〔闇〕形声 声符は音。暗黒・暗黙・幽暗などの意がある。音とはもと目にみえないもの、視覚ではとらえがたく、かすかに聴くことのできるものをいう。暗は古くは闇とかかれ、経伝にはみな闇の字を用いる。闇・暗は古今の字である。〔周礼〕によると、日食や月食をも闇という。すなわち闇がもとの字で、暗はその分化した字である。したがってその初義は、闇の字形によって考えるべきである。闇はもと、廟門で行なわれる儀礼に関する字であろうと思われる。問は廟門に³⁰⁾、すなわち祝詞を収める器をおいて、神意を問うことを意味する字である。同じく廟門に言をおくのは闇、その字はおそらくもと廟門で哀訴することをいう字であろう。言は神に盟うことばを意味する字。祝詞を示す³¹⁾の上に、自己詛盟として、誓言にたがうときには³²⁾辛³³⁾を受けの意味で、辛をおく形の字である。音はその³⁴⁾の中に、もののあらわれる意を示す。すなわち神の音なひをいう。廟門で問い、闇々として訴え、これに対して神の音なひがあらわれることを闇という。それとなく、人知れずあらわれるものであるから、幽暗の意がうまれる。この字を暗愚のように用いるのは、甚だ神意にそむくものというべきであろう。暗はのち明暗の暗の意に用い、日に従う字となったが、本来は神のあらわれる闇をいう語であった」(字統)。この沈黙、この静安から、その都度、人間への応答、動きが始まる。人間への動きは、そのため、何か根源的なるものを手にする。その動きは、まる

で、その都度、初めてなされたかのようなのである。静安への動きが始まった途端、外ならぬ運動のみしか存せぬところ、顔が専ら運動でのみ成り立っている場合より、遙かに早く、人間への動きは、ここ沈黙に在って、真の動きの正体を識るのである。³¹⁾

およそ瞬時にせよ、私たちは、お互いに出会い対面する時、このような状況に身をおいている。しかし、或る種の戦慄を憶えずにはお互いに正視することはできない。一人の人間の顔を見ることは、なによりも、神のなさることであり、人間はそのために、神へ面を、黙して、静かに向けるだけである。私たちが対面する時、³²⁾ 怖々と、伏目がちになったり、一瞬視線をあらぬ方へ逸らすのは、恐らく、身のほど知らぬ己が所行に、言い知れぬ畏怖か羞恥を憶えたからであろう。顔を眺めること、それは、元来、慈愛に充ちた神の眼指しに属することである。だから、私たちが、言葉無く、静かに、対面し合える時、その眼指しの交わる場所には、神の慈愛の学びが有るのかも知れぬ。「人間の顔をみつめている人は、神に熟視されたのと同じ位の深い愛を込めて、僭越にも、人の顔を打ち眺めている。愛の雰囲気の中において、はじめて、人間の顔は、神に創られた姿そのままに、身を保つことができる。神の似姿としていられるのである」³³⁾

逃走の顔については、終始それについて離れぬ慈愛の眼指しは *das Mehr, Gottes Mehr* と呼ばれた。像が生命と持続に守られた状態を指している言葉であった。³⁴⁾ 顔の造作、その中でも特に眼を中心に、全体の布置、意義が述べられた。同じように信仰の世界との対比で語られる。信仰の世界では顔は目的よりもはるかに豊かに存在性を具えている。顔のどの部分にも豊かな本質が、そして全体には、殊更に、豊かな本質が宿っている。それは、目的などで到底説明できぬほどである。顔全体とその各部分は、この豊かなものの中で生きている。このような顔の一部である眼は、逃走の眼よりも、はるかによく見える。眼は、見て受取るだけでなく、眼指しと共に事物に与へもする。眼は自らに具わる豊かなものから与える。人間の顔は、その中に豊かなものを宿すことによって生きている。従って人間の顔に見られ呼びかけられた事物も、顔に宿る豊かなものに拠って生きている。それらは、すべて、像が根源的に溢れ出ずるもの *ein Überfluß* を宿していることによる。

似姿としての人間が他人の顔を観る時、その視線は、神のそれを真似ている。だから、一人の人間の顔を隈無く見て了うまでには時間がかかるのである。それに要する長い時間の中には、神御自身がその創造物に対して抱いておられる、あの忍耐と期待とが幾分かは有る。一人の人間が他の人間を識る際の緩やかな時の流れは、その人に払われる敬意なのである。およそ観相学なるものが、手間を省き、まるで旅行案内書でも見るように、人間の顔の知識を、あれこれ伝えたとしたら、そんなものは誤りどころか、人間としての品位、人間に対する尊敬も有ったものではない。ピカートが自著に『観相学の限界』と名付けたのは、まるで人事の命運を悉く知りつくし、左右できるかの如くに説き、振舞う、占星学や筆蹟学、はては精神分析学が、観相において根本的誤謬を犯していることを指摘することにあつた。およそ認識が成立する根本要件をピカートは簡潔、明解に提示する。

認識しようとする者が認識される者に愛を用意している場合、はじめて私たちは一人の人間を認識することが許される。認識に目的は不要である。如何なる場合に認識する者は愛を用意すべきか、如何なる場合に愛が必要か、そのことを認識しようとする者に指示する手段、それ

が認識である。³⁶⁾

ところが認識の危機は、認識しようとする側にものみ有る訳ではない。認識される側にも同じように危機を迎え入れる条件が整っている。顔は、今や、似姿であることを止めて了ったかに思われる。萎縮し、乾涸び、がたがたと軋み、それぞれの顔の造作は、今にも崩落四散して了いそうなのである。認識が、唯、認識のためにのみなされる場合、一人の人間の品位が奪われるだけではない。認識の品位も失せるどころか、第一、認識しようとする人自身が自らの品位を奪っている。しかし、このように言えるのも、奪うに値する品位在っての話である。今や顔からは像が消えて了ったのである。顔は観相に応しい存在でなくなった。そのための資格、条件を一切失って了い、慈愛の眼指しを恥じらうかのように、分析への道を急ぐしかない。

語らいには、単なる伝達以上のものが有る。それは、語らいが像であることの印^{しるし}である。

像は言葉を高める。事物は自ら語る。さもないと、事物に代って、言葉が語る。

像の意味は内容に在るのではなくて、内容が像を借りることによって意味をわがものにする。

——『遺稿断簡』³⁷⁾——

逃走のために像が崩落、雲散した顔では、その造作も、また、悉く、逃走の道具に化している。口は物を言わなくていいかのように、軟体動物よろしく口をぱくつかせているだけで、時折、逃走の合図を叫ぶのが関の山である。ところで、本来、顔は一つの像であって、それぞれの造作が単に寄り集っているものではない。像である顔からは一種の至上の権威が発露していて、それが顔の個々の部分を一つに纏めて像を形成しているだけではなく、同時に、その顔を観ている人に、顔の部分を個々ばらばらに見るのではなく、纏めて一つの像として観なくてはならぬと迫るのである。³⁸⁾



ドーミエ「取引所にて」

今、逃走の顔には、至高の威厳どころか、像さえも絶えて久しい。顔の個々の造作も、それが在るべき場所に隣り合っただけが精一杯であるかに見受けられる。このような逃走の顔に在る口からは、凡ゆる言葉がすでに飛び去って了っている。口は、はや遠くへ行って了った言葉を^{なぞ}擦っているにすぎない。口は徒らに明確な境界を設けようとする。顔には沈黙の深さが微塵も認められず、唯、空虚のみ。口は空虚に耐えて身を持^しすることができず、口を開け、そこから逃げ去った言葉に躓く。まるで軟体動物のように、口は開いては、又、確りと^{つぐ}嚙む。ここには、もはや、顔の個々の造作を全体の中へ組入れる像の力はない。だから、それぞれの部分が我れ先にと前面へ迫り出ようとする。顔は歪み、不明確になる。似姿を失った人間、何一つ境界を持たぬ人間の場合には、過去、現在、未来が一種無類の混沌状態を呈している。だから、この人間に

起る凡ゆることが似ているように思われる。だから、このような人間は、徒らに、無理矢理振じ曲げて、いつも同じものに別の形を与えようとするのである。ピカートの分類によれば、「終末の人間」の様相であり、その好事例がオノーレ・ドーミエ（Daumier, Honoré, 1808-1879.）の戯画「取引所にて」であると言う（11頁図参照）。これに続くピカートの分類項目は、「魔性的な顔」³⁹⁾、「悪魔の顔」⁴⁰⁾、そして「渾沌たる顔」となっているが、そこから数頁先のところでピカートは、すでに、ドーミエの別の作品「肖像」を取り挙げて次のように脚注を添えている。「ドーミエの人物画の場合、戯画がその本質的要素ではない。その人物画にはカリカチュアを遙かに超えた真実がある。人間は、神の似姿としての立場から身を随し、もはや似姿としての身分に支えられなくなれば、計り知れぬ奇想天外なものに身を⁴¹⁾持ち崩す」。

参考までにピカートが『観相学の限界』の中で補遺として添えている人間のタイプを要約すると次のようになる。

一 終末の人間 *Der Mensch am Ende*

自分たちが神の創造によって暗黒から明るみへと連れ出されたことを、すっかり忘れている人間。彼等の顔の線は蜘蛛の巣のようである。この蜘蛛の巣が好きこのんで顔の真似をしている。

二 魔性的な顔 *Dämonische Gesichter*

自分たちが神の創造によって暗黒から明るみへともたらされたことを知っており、しかも大抵の他の人々よりもよく知っておりながら、不遜や反抗のために、或いは絶望のために、神の創造の行為を承認することを拒む人々の顔は魔性的である。そのような顔は、自分が自己の創造者であろうとする。

三 悪魔の顔 *Das Gesicht des Teufels*

神の創造が否定される場合、神が人間を闇から明るみへ高められたのは不要なことだと言われる場合、悪魔の顔では、明るみへの道程が一番はっきり現われる部分、つまり額が抹殺されている。

四 渾沌たる顔 *Das chaotische Gesicht*

ここでは、かつて一つの顔が暗黒から明るみへと辿りついたということが、すっかり忘れ去られている。渾沌^{カオス}というものは、もともと何が前方へともたらされたのであるかを人間が忘れてしまうことによって発生する。人間はただ、とにかく何ものかが一つの激しい運動によって前方へもたらされたという単なるそのことしか知らない。そして、このような顔をとにかく支え保っているのは、もっぱら前方への激烈な機械的運動、内容なき単なる運動だけなのである。このような顔の中ではすべてが前方へと突進する。そこでは待つことは存在しない。⁴²⁾

「^{はじめ}太初に^{ことば}言あり、^{ことば}言は神と偕にあり、^{ことば}言は神なりき。この^{ことば}言は太初に神とともに在り、^{かみ}萬物の^あこれに^よりて^な成り、^な成りたる^{もの}物に^{ひと}一つとして^{これ}之によらで^な成りたるはなし。^{これ}之に^{いのち}生命あり、この^{いのち}生命は人の^{ひと}光なりき」(ヨハネ傳福音書、第1章1—4)。萬物の根源、生命、光が言葉だと、この世界最大の言葉は教える。洩らすものなき寛容、慈恵と明澄に溢れている。神の言葉が神に似ているように、人間の言葉は人間に似ている。だから、言葉には体と魂と精神⁴³⁾が有る。聖句に従

えば、私たちが神に^{あでか}肖り^{みわざ}御業により似姿を纏った日、言葉はすでに在った。あの日から人間が最初の言葉に辿りつくまで、一体、どれほどの時が流れたことであろう。創造の前に沈黙があったように、人間の場合にも、似姿から、その言葉が口元から^{こぼ}零れ落ちるまで如何許りの沈黙の時があったことであろう。

言葉と似姿、この二つは私たちに本来具有のものでありながら、しかも言葉は、外ならぬ似姿から発露するものであるのに、それぞれの成り立ちの上から、全く別のものなのである。この事情をピカートは巧みに説明する。言葉と顔が別々に分れていなければ、言葉が顔から外へ洩れる度毎に、顔は言葉の動きで^{ゆす}揺られ、⁴⁴⁾平衡を失う。言葉の本源的な力と、似姿の移ろい易さ、脆さを同時に言いえて妙である。顔も言葉も、それなりに一つの世界なのである。従って、言葉は、どこどこまでも、只管に、言葉であることが出来、顔という全くの赤の他人を前にして、初めて、言葉が全うな言葉に成るように、顔の方も、このような言葉の前で、初めて、本当の顔に成る。言葉がこれほどまでに顔と離れているものだから、言葉が決して顔で生まれたものではなく、顔以前に、外の何処か、顔から遠く離れたところ、言わば無からでもひよっこり出てきたように思われる。でも、この無は、決して空虚なのではない。無とは言っても、そこから凡ゆるもの、凡ゆる言葉の生れ出る、創造以前の神秘に^{あずか}与る⁴⁵⁾無なのである。言葉は、元来、顔で生れたものではない。しかし、顔の造作の一つ、口から出るものではある。だとすると、口は、音声は言うまでもなく、その形状、運動と共に、言葉にとって、積極的に、橋頭堡の役割を荷負う。口には、開かれた門と言うより閉された門の名が応しい。顔は、口のところで、身を閉し、内に^{こも}籠る。すると、言葉の向うに出来た壁のように口が立ち足はだかる。そのお蔭で、言葉は、口の背後に在る、あの顔とは全くの無縁で通すことが出来るのである。だからと言って、言葉が、^も並べて、顔と無関係などと言っている訳ではない。その逆に、言葉は顔の像に寄り添っていたいのである。言葉、つまりは始源の言葉によって似姿が創造されたのである。だから人間の言葉は、又、人間の像に属している。人間の言葉は人間の像の側にはいるが、きっぱりと離れている。かと言って、敵対のせいで分断されているのではなく、言葉の特質と特異性によって分れているのである。言葉が、ヨハネ伝初章のように、信仰を通じて始源の言葉と結び付いている中は、言葉には、顔の像を把持し、大地に確立するだけの力が有る。

このような場合には、言葉は三つの世界へ身を延ばす。身体の世界、魂の世界そして精神の世界へと展開して行く。三つの世界からは、言葉へ力が滔々と流れ込む。そのために言葉は満ち足りて、三つの世界に支えられる。だから言葉は、ここ信仰の世界では安定している。言葉の身体は消える。消滅して沈黙へ帰ることができる。とは言っても、言葉が行方知れずになった訳ではない。何故なら、言葉の精神が言葉を呼び戻す迄、言葉の魂が言葉を自らの深所に^{かく}匿まっているからである。そして、ここ言葉の深所で、言葉は、言葉の魂が相寄る、^{かそ}幽けき共同体の中で日を重ね乍ら、精神の呼び掛けさえ有れば、明瞭な言葉の身体となつて^{なんどき}何時でも、飛び出そうと滴を持しているのである。⁴⁶⁾

これまでは、いわば始源言語に支えられた確固たる^{かなえ}鼎のような言葉の世界であった。それとは反対に、今、ここ、眼前に広がる逃走の世界での言葉は、一体、どのような様相を呈しているのであろう。逃走の言葉では、沈黙と言葉との間に、もはや、距離が無い。ここでは、もはや、沈黙から言葉へ敢て跳躍しようとする必要はない。沈黙と言葉の双方が融け合つて眩きになって

いる。ここには、もはや、詩を詠^{えい}ずることもない。沈黙を音調にのせることは無くなり、饒舌^{じょうぜつ}を眩きに変える。一切のものを、この眩きの中へ抛り込んで差し支えないのである。ここでは、すべてが似たもの同士になる。危険この上もないことを言い振しても平気でいられる。眩いている段には、この上ない危険なことも、全く危険の無いものに見えるからである。従って新しいものが古臭く思われ、一切のものが、もう随分以前に眩かれていたようであり、総てが皮相浅薄⁴⁷⁾になる。

言葉に深さが無くなった。だから、余韻も無く硬い。言葉は、もはや、内へ伸びることが出来ず、外へ向うのがやっとの思いである。言葉は、かくて、凡ゆるものに曝される。そんなことがいい筈はない。そこで言葉は攻撃的になり、語りかけられている人に向って突進する。その勢いは、語っている人の意図を遙かに越える。言葉は、また、逆に、拒絶的であることを止めない。だから、それぞれの言葉は、まるで、尖端を上向きにした鉄棒のようである。脅迫するように言葉の鉄條網が立ちだかっている。そこへ入り込んで来るものは、何であれ、すでに前以て、ずたずたに引き裂かれている。言葉の間に出来た間隙は狼穴同然、そこへ何もかもが落ち込む。言葉には容赦^{かげら}の欠片も無い。

すでに、言葉の体は四散し、言葉の魂と精神も自らの寄る辺を失って了ったかのような。しかし、ピカートは、瓦礫と化した言葉の山から、一握りの余燼を探り当て、そっと^{たなごころ}「掌」に戴き、幽^{かそ}け息吹きを送ろうとする。逃走の世界の詩人たち、彼らは、すでに、崩壊した言葉の体の片々を寄せ集め、次々に在るべき場所に置き、二度と滑落しないように見張ることに全力を注いできた。言葉の体に魂を、そして精神を付与するだけの力を、猶も、一人の詩人が持っているとは、一体、如何なることであろうか。

なりわい^{なりわい} ささ^{ささ} いのち^{いのち}
 生業に捧げし生命いづくに
 物識^しるに失せにし智恵やいづく
 見聞に傾けし知力^{ちりき}何辺に
 天界は巡^{めぐ}り回^{めぐ}りて二千歳^{ふたちとせ}
 吾ら神にいや遠く^{ちり}塵に近くなりぬ
 ——「岩の合唱」⁴⁸⁾——

「人間の言葉に具わっている精神は、初めて事物を言葉に結び付けたあの神の精神の痕跡を留めている。信仰の世界の事物は、凡ゆるものが名前を求めて言葉に近付いた。事物の発端に憶いを馳せながら、言葉の方へ殺到する。今猶、言葉が事物を呼び寄せる時、事物は、あっという間に言葉に填り込んで、言葉に抱かれている様子がひしひしと感じられる。人間の精神が神の精神から離れていない時、はじめて、人間の言葉は諸々の事物を把持するに足る力を具えている⁴⁹⁾」、これが、信仰の言葉と逃走の言葉を交々に語る内に、ピカートの胸中に、僅かに、影を落した可能性であり、希望の曙光であった。「逃走の世界における言語」最終章の結びは、ピカートが末期の人間とその言葉に呼びかけた熱禱の玉章と言っても過言ではないであろう。

人間自身よりも、はるかに崩壊、分裂が甚しく、散乱している言葉が、一体、どうすれば、

元通りに、再起賦活することができるのであろうか。人間が言葉を集める時、と言っても、ゆっくりと、一つずつ神へお返しする為には、自分が全く^{かきん}瑕瑾の無いままに受取った言葉を、斯くも無慚な姿でお返ししようとしているのではないかという不安と慙愧に身を小さくして、祈りながら言葉を集めるならば——つまり、人間ではなくて、哀れな言葉のみが神の御前に在るように、人間は身を縮め言葉の蔭に身を潜めなくてはならぬ。言葉であり完璧そのものであるお方、^{くわん}久遠にして全きものとしての神の御前に哀れなる言葉がおかれるならば、その時初めて、死して切り刻まれたるもの、言葉が元通りに生れ変るのである。⁵⁰⁾

『神よりの逃走』では、始源の言葉の賦活のために、人間は、当然のこととして、言葉の蔭に身を縮め、己が罪科故に、身を以て、恭順を示さねばならなかった。この時示されたピカートの言葉への想いは、像のそれと共に『観相学の限界』へ持ち込まれる。「言葉が信仰によって始源の言葉と結びついている限り、言葉は顔の像を、この地上に確保する力をもっている」ことを再認した上で、言葉をめぐって、このたびは、人間の立場を明確に定めている。もはや畏怖に身を縮めず、^{おもて}面を上げ、^{うなじ}頤を伸し、神に対せよと言わん許りに見える。

人間は問うてもかまわない。だが、^な答えねばならぬ。神に^な答えねばならぬ。何故なら、そのことのために人間は、何にもまして、神から言葉を授かったからである。神を問い質す権利は人間に無い。何故なら、人間は神に問い質さるべき者だからである。人間はこの地表に一つの疑問符として、すっと、建てられている。「アダムよ、汝いづくに在りや」と人間に問い質しておられる神の疑問符でもある。⁵¹⁾

地表に垂直に据えられた疑問符としての人間——それが神の疑問符と重なる時、果して如何なる意味を持つのであろうか。第一、「アダムよ…」と神が口から洩された時、久遠のパースペクティヴに、白々と影を落したのは、やはり、^{いきよう}巨怪、異形の人間だったのか。それとも、神の呼び掛けに、振り返った人間の視野に入ったのは、二千年隔てて、砂漠の丘に立つ一つの原像だったのであろうか。

註

- 1) Max Picard, *Fragmente*, S. 18, Eugen Rentsch Verlag, Erlenbach-Zürich, 1978.
- 2) Ernst Cassirer, *Philosophie der Symbolischen Formen*, Zweiter Teil, Das Mythische Denken, S. 311., Darmstadt, 1973.
- 3) Max Picard, *Das Menschengesicht*, Sechste Auflage, S. 14., Eugen Rentsch Verlag, 1955.
- 4) *op. cit.*, Wir wissen wohl, daß Gott nicht nur am Menschengesicht, sondern an der ganzen Gestalt des Menschen sich offenbart. Aber da das Bild Gottes im Menschengesicht am sichtbarsten ist, behandeln wir vor allem das Menschengesicht.
- 5) Picard, *Das Menschengesicht*, S. 238.
- 6) *op. cit.*, S. 243.
- 7) Max Picard, *Die Flucht vor Gott*, Dritte Auflage, S. 171ff. Eugen Rentsch Verlag,

Erlenbach-Zürich, 1951.

- 8) Cassirer, *Philosophie der Symbolischen Formen*, II, S. 311. カッシーラー著『シンボル形式の哲学, 第二巻神話的思考』(2), 481頁, 木田元訳, 岩波文庫, 1991年9月17日, 第1刷。
- 9) *op. cit.*, S. 282.
- 10) Picard, *Das Menschengesicht*, S. 241.
- 11) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 172ff. ピカート著『神よりの逃走』, 179頁, 坂田徳男・佐野利勝・森口美都男訳, みすず書房, 昭和38年5月30日, 第1刷。
- 12) *op. cit.*, S. 174.
- 13) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 177.
- 14) *op. cit.*, S. 184.
- 15) *op. cit.*, S. 183.
- 16) *op. cit.*, S. 191.
- 17) *op. cit.*, S. 12.
- 18) *op. cit.*, S. 195.
- 19) *op. cit.*, S. 195.
- 20) Nicolas Berdyaev, *The Fate of Man in the Modern World*, p. 44., Ann Arbor Paperbacks, The University of Michigan Press, 1961.
- 21) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 197.
- 22) Picard, *Fragments*, S. 38.
- 23) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 172.
- 24) 邦訳『神よりの逃走』, 180頁。
- 25) 前掲書, 180頁。
- 26) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 174.
- 27) *op. cit.*, S. 175.
- 28) Picard, *Die Grenzen der Physiognomik*, S. 173.
- 29) *op. cit.*, S. 139.
- 30) 白川静著『漢字の世界』2, 42頁, 東洋文庫286, 平凡社, 昭和52年2月1日, 初版第2刷。
 聞とは, 一定期間タブーに服するための凶慮をいう。聞は文字の通り, 門に言(祝告)をおき, その啓示を待つ義であろう。聞を『説文』に「閉門なり」とし, 音声, また問については「訊なり」と訓し門声とする。しかし両字は何れも門中に音あるいはきこをきこおく形であり, 門における呪祝の儀礼をいう字であろう。それは神の「おとなひ」を聞くべきところである。その声を聞きうるものが聖, これを心にさとることを聽〔聴〕, その徳を聽〔聡〕という。聞もまた, 古くは聖に近い字形であった。音の世界はまた, 神明との交通の場所であった。
- 31) Picard, *Die Grenzen der Physiognomik*, S. 13.
- 32) cf. *op. cit.*, S. 13 ff.
- 33) *op. cit.*, S. 14.
- 34) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 176.
 Das Auge eines solchen Gesichts sieht darum auch mehr als das Auge der Flucht ; es nimmt nicht nur, indem es sieht, es gibt dem Ding auch mit seinem Blick, es gibt ihm von seinem Mehr. Ein Menschengesicht lebt davon, daß dieses Mehr in ihm ist, und die Dinge, die von ihm gesehen und gerufen werden, leben auch davon.
- 35) Picard, *Fragments*, S. 36.
- 36) Picard, *Die Grenzen der Physiognomik*, S. 15.
- 37) Picard, *Fragments*, S. 34.
- 38) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 172.

39) Picard, *Die Grenzen der Physiognomik*, S. 69.

40) *op. cit.*, S. 39 ff.

41) *op. cit.*, S. 34.

42) *op. cit.*, S. 39 ff.

邦訳『人間とその顔』, 34-37頁, 佐野利勝, みすず書房, 昭和34年1月31日, 第1刷。

43) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 115.

44) Picard, *Die Grenzen der Physiognomik*, S. 81.

45) *op. cit.*, S. 82.

Jedes ist eine Welt für sich : das Wort kann ganz und gar nur Wort sein, und wie es vor dem ganz und gar Anderen des Gesichtes erst recht Wort wird, so wird das Gesicht vor einem solchen Wort erst recht Gesicht. So getrennt ist das Wort vom Gesicht, daß es scheint, als sei es gar nicht *am* Gesicht entstanden, sondern *vor* ihm, irgendwo anders, fern von ihm, überhaupt wie aus dem Nichts entsprungen, - aber dieses Nichts ist nicht die Leere, es ist das Nichts, das teil hat an der göttlichen Ungeschaffenheit, aus der jedes Ding und jedes Wort entspringt.

46) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 117 ff.

47) *op. cit.*, S. 126.

48) T. S. Eliot, *The Waste Land and Other Poems*, p. 72., Faber & Faber, London, 1961.

TWO CHORUSES FROM 'THE ROCK'

The Eagle soars in the summit of Heaven,
 The Hunter with his dogs pursues his circuit.
 O perpetual revolution of configured stars,
 O perpetual recurrence of determined seasons,
 O world of spring and autumn, birth and dying !
 The endless cycle of idea and action,
 Endless invention, endless experiment,
 Brings knowledge of motion, but not of stillness ;
 Knowledge of speech, but not of silence ;
 Knowledge of words, and ignorance of the Word.
 All our knowledge brings us nearer to our ignorance,
 All our ignorance brings us nearer to death,
 But nearness to death no nearer to God.
 Where is the Life we have lost in living ?
 Where is the wisdom we have in knowledge ?
 Where is the knowledge we have lost in information ?
 The cycles of Heaven in twenty centuries
 Bring us farther from God and nearer to the Dust.

49) Picard, *Die Flucht vor Gott*, S. 129.

50) *op. cit.*, S. 133.

51) Picard, *Die Grenzen der Physiognomik*, S. 85.

補 遺

飛田就一教授は、1995年3月末日にて定年を迎えられる。長い歳月に亘り教育と研究に傾注し

てこられた情熱に対して敬意を表するものである。

飛田君と私は立命館大学文学部哲学科哲学専攻の同窓である。卒業年次は私の方が6年早い。下世話に言う先輩に当る。その関係が直接始まったのは恐らく1957（昭和32）年4月頃からであろう。この年、文学部は木造校舎から、新築の清心館へ移った（河原町通広小路）。東西に長く南面した新学舎は4階建てで、1階から3階までは、中央線を東西に廊下が走り、部屋を南北に分けていた。哲学専攻研究室は3階西側で南面し、その東隣に英米文学専攻研究室が壁一重で続いていた。運命の徒らか、この両隣りの家守り役が、予科、学部の同期、その上、立命館大学助手の発令年月日まで重なり合った二人であった。哲学科専攻の助手が大島正道氏で、英米文学専攻の方が私であった。思出しても不思議なのは、恩師、故山元一郎先生から呼出しを受け、就職確定を告げられた日、この二人は、卒業以来半年振りの再会を喜び合ったことである。1952（昭和27）年9月1日、木造校舎、哲学専攻研究室での一時であった。

飛田君が、母校の文学研究科哲学専攻修士課程を了えられたのが1962（昭和37）年3月、私が助手を辞して、北大路へ転任したのが、その前年であったから、交誼の歳月は数年に充たない。しかし、この時期は、同君が、鬱勃たる覇気に溢れ、学究への指針を錬成、模索しておられた精進一途の年月であったように思う。

山元一郎、牧祥三両先生の知遇を得て、母校に職を奉じられたのは何時だったのだろうか。私が北大路から帰任したのは1967（昭和42）年4月1日、この時、すでに、飛田君は、ドイツ語では勿論、哲学、特に、論理学で一家をなしておられた。1961年以後の研究活動がヴィトゲンシュタインに集中展開されているのが、その成果の一端である。6年ぶりに、私との交誼も再開、復活した。

久闊を叙するという言葉がある。久しく闊^{とほざか}っていた非礼を詫びる意をこめて交される。しかし、若し古義に則して、闊が、門が広くて通り易いことであり、活も、また、水流のゆたかにして盛んなる意であることから、その声義に因んで言えば、再会の飛田君から受けた印象は、闊達、闊歩であった。この美質は天性に加えて、同君が大陸、大連の育ちであるという風土の助力も加わっているのであろうか。彼の周囲には巧まずして、同学の士が集い、その集中力が幾冊かの論集、共訳書として実を結んでいる。

1991（平成3）年11月、過労か、宿痾^{こじ}が拗れたのか、飛田君は入院、年余の加養後、元の生活に戻られ今日に至っている。

本来ならば、この記念すべき論稿は、大島正道氏の手になったものが応しい。しかし予後幾許も無き身故、私が、代って、この小稿を三人の友情の微志として飛田君へ贈ることとなった。諒とされたい。

1994（平成6）年10月20日